

物語みたいな物語

凍傷

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不細工な人の物語みたいな物語。

そもそも不細工は、人に自分を知ってもらえる機会自体が稀である。

だって……基本、距離取られるしね。

家族か、仕事仲間としてじゃなきゃまず無理なんじゃないかなあ……。あ、いや、それも難しいか。家族でも仕事仲間でも、〃キモい、ウザい、死ねば?〃しか言わないキモウザ・シネーヴァさんは居るもんだし。

まあともかく。

そうして小さな頃から不細工として扱われ、人生に大分疲れていた存在が、事故を切っ掛けにいろいろ諦めてからいろいろ変わる物語。

他人の不幸は蜜の味、なんて言いだしたのは誰なのかしら。いっぺん筆筒の角に小指ぶつけて苦しんでほしい。もしくは素足でレゴ踏めレゴ。

そんな、おっさんになった不細工の小さなお話である。

目次

1 : 八十島芳樹―やそじまよしき	1
2 : 因幡すみれ―いなばすみれ	5
3 : 因幡雄大―いなばゆうだい	11
4 : 因幡結衣―いなばゆい	17
5 : 笹村絵里―ささむらえり	24
6 : 八十島芳樹―やそじまよしき(再)	32
7 : 因幡すみれ―いなばすみれ(再)	40
8 : 因幡家の人々―いなばけのひとびと	48
9 : 片桐芳樹―かたぎりよしき(終)	57

1：八十島芳樹―やそじまよしき

仕事仕事仕事仕事。

人生仕事こそ墓場だ〜って思うのって間違ってるかな。

結婚が人生の墓場だつて言われても、好きな人と結ばれるつて時点でまだ救いがあるんじゃないの？

一時だろうとリア充して、そんな相手と結ばれて〜つて、それだけいけたならいいじゃない。

こちら顔がキモイつてんで女性にモテたこともないし、気になつてた女性に“性格良くてもあの顔じゃねえ〜”なんて陰口たたかれたことのある猛者だ。

せめて体を鍛えれば、せめてファッション、せめて趣味、せめて、せめて。

頭が良ければ少しでも頼ってくれるんじゃない、なんて衝動に駆られて勉強したりもした。一時期だが、家庭教師だつてしたこともあるほどに。

けど、努力の全部をこの顔で台無しにされたわ。

他全部がいいのに顔がねえ……って溜め息吐かれた俺、乙。

俺と一緒に居ると女性も逃げるつてんで、男友達も出来ないしね。

そのくせ有能だからって仕事は回す。ふざけんちくせう。……やるけどさ。

「あー……仕事終わったらガキどもの食うもん用意しないと」

え？ 子供？ 居るよ？ 俺の子じゃねえけど。

姉と義兄が同じ仕事やってて、なんでも上から重要プロジェクトに参加することを命令されたらしく、やりたいことだったからって引き受けたんだと。

で、それが海外ですることだつてんで、子供、連れていけないんだとか。16で結婚して子供産んで、厄介事に俺を巻き込みつつ高校卒業、大学卒業、義兄と同じ会社に入ってアレコレして……で、プロジェクトですよ。

仕事行って帰ってきたら子供が二人。鍵かけた筈なのに子供が二

人。

親が離婚して蒸発して、祖父母に引き取られて、祖父母が死んでしまった、俺と姉貴だけになって、姉貴が結婚を機に出て行って、俺だけがここに、ここから仕事に。まあ家賃かからんってのはいいことだ。ちと遠いが。

そんな場所に書置きがあつて、つまりそのプロジェクトのために姉とその夫が海外へ出たことを知って、深く絶望。

子無し一人暮らしの自由な空間はカオスと化した。

言うこと聞かないし悪戯はするし口調はナメとるし。

あのね、キミら追い出すの、こつちの気分ひとさじで決まるのよ？

別に俺はあの姉にはなんの恩もないし、むしろ今まで散々苦勞かけさせられた。

それをあの義兄がもらつてくれて、あるとしたらその義兄に、そのことについての恩程度だ。

つまりその感じている恩義の許容を超えたことをされれば、容赦なく追い出す。

しかしまあ結衣ちゃん可愛いから我慢できるけど。

ただし雄大、てめえは許さん。

「けれど眞原はそこまで出来ないヘタレの鑑である」

帰り道に「スーパー・超」に寄つて杏仁豆腐やオムライスの材料を買つていく俺。ケチャップなかったのよね、ケチャップ。

え？ おやつならプリンだろ？ とんでもない、俺にとって至高は

杏仁豆腐よ。

そして結衣ちゃんはそれがわかる数少ない理解者である。

雄大はそれを否定しやがったからなちくしょう。今日はその美味を存分に味わわせ、杏仁道府どらぶに導いてやるのだ。

「つと、そういや今日、ヤムチャ転生の発売日だっけ」

ドラゴン画廊リーさん、絵え上手だよなー。

ドラゴンボール菜も欲しいんだけど、俺そういうのの買い方とか知らんからよくわからんし。

「んじや、あとは野菜を買つて、魚をー……魚かあ」

昔から、魚には憧れた。

水の中でちやぷちやぷと泳ぐその姿、その自由。

俺みたいに顔がダメな上にノーと言えず、貧乏くじばっかり引いてきた人生を思い返せば、あんな顔なのに自由であるのがほんのちよっぴりうらやましかつたり、とか……はあ、なあに言ってるんだか。

さつさと帰ろう。

んで、ガキどもに変顔のおっちゃんって呼ばれながら料理でも作るう。

……ん、電話が。

「ん、っと……はいはい、なんだよ姉貴」

『やほー。やあーごめんねえ芳樹い、面倒押し付けちゃってえ』

「ガキどもなら追い出したから」

『嘘つくの下手だねえ。駆け引きもせずに用意した答えだけを言う癖、まーだ直ってない。そればつかを言おうとするから焦っちゃって声が上がるとし』

「……なんの用だよ。人の自由を奪っておいて」

『いや、純粹に謝りたくて。今回のはほんと、勝手だった。自分がやりたいものを吊るされたからって、他のもの押し付けてそれにかぶりつくようじゃ、なんのために子供を作ったのかって話よね。ごめん』

「……あのさ。そっちはしおらしく謝ってるつもりだろうけど、そういうのってこっちに後味の悪さしか残さないからな？　じゃあ嫌だつて言えば子供を見捨てたみたいで後味悪いし、許さなければこっちが小者みたいな嫌な気持ちを残す。だからって本心じゃ許したくないし納得も出来ない。何度も言ってきたけどな、俺、姉貴のそういうところ、本気で嫌いだから」

『……ごめん。あの人と一緒にになってから気づいたこと、いっぱいあつてさ。芳樹にはほんと感謝してる』

「いいって言ってるだろ。それから——」

『ん……それから？』

「……俺さ。魚になりたい」

『へ？』

「恨むからな、姉貴。買い物なんて来なけりや、こつちの道なんて通らずに済んだんだ」

『うん……恨むのは、仕方ない——っひ!? え、ちよ、なに!? すごい音鳴ったよ!? 芳樹! 芳樹!!』

轟音。そして、浮遊感。

スマホが手から離れて、地面を滑った。俺は大きく飛ばされて、地面に激突。

悲鳴が聞こえて、世界が赤くて、それで………それで。

「……………ただ、たのしく生きたかっただけなのにな……」

こんな顔に生まれたのがだめだったんだろうか。

俺はただ普通に生きてきただけだったのに、周囲は難しいことを俺に押し付け、自分たちは笑っていた。

手を伸ばしてもキモいと引かれ、男たちもお前が居るとき……ほら……なんて一歩引いて苦笑した。

みんなそんな顔だったら、普通でいられたんだろうか。

……もう、いいや。どうせこんな顔や人生ともおさらばだ。

よかったな、みんな。変顔のキモい男はこれで居なくなるよ……。

2：因幡すみれ―いなばすみれ

朗報、なんか普通に生きてた。

これで怪我の結果、顔面が強制整形されました、イケメン俺爆誕、とかだったらもうラノベっぽかったんだが。ん？ ラノベだったらイケメンに転生してたか？ ……してたな。ほんと現実ってクソゲー。

あ、しかもなんか超奇跡的に、超軽傷で済んだ。赤かったのは、買ったばかりの潰れたケチャップだった。いやあ、さすがに人生諦めた原因がケチャップって笑える。

様子見つてことで休ませてもらっても、一週間もすりゃあ仕事に復帰できたし、俺が車に撥ねられたってんでびゃーびゃー泣いてたガキどもも、今じゃなんだか一丁前にキリツとしてる。

近い者の事故とかって、嫌でもいろいろ考えさせられるんだろう。しかも俺が杏仁豆腐の材料が入ったレジ袋を持っていたのをガキどもが知っていたらしく、〃自分たちのおやつを買うために寄り道したから事故に遭った〃と誤解をして、しつかりしなきやと立ち上がったのだろう。

まあ、ある意味間違つてはいない。おやつじゃないけど、食事のための買い物だったわけだし。

ただまあこのことについては姉には伝えてない。プロジェクトとやらのために子供まで押し付けたバカ姉なんぞに誰が教えるもんですか、そのまま意欲満点で仕事を成功させろってんだ。

「ちよ、先輩マジ大丈夫なんスカ？ 事故ツで一週間で復帰とか……」
「へん顔だからツラの皮どころか体も丈夫だったんだろ。ほれ川西、こっちよろしく」

「やつ……そりゃいいすけど。……はあ、ほんと先輩鋼メンタルつすよね。俺だったらいろいろ折れてますよ。骨とか心とか」

「いーんだよ。こんなんもう慣れだ。自分のツラでもネタにしないと生きてくのも億劫になる。だからって誰にネタにされてもいいってわけじゃないから、あんま調子に乗らないこと」

「……なんか先輩、いろいろスッキリした顔するようになったつすね。

前はなんか世界そのもの憎んでるような顔でしたけど」

「今もそんな変わってねーよ。いろいろ諦めたただけだ。車に撥ねられる時、あ、これ死んだって思ってたな？ そしたら命とか自分の顔とか、こんな簡単にオシヤカになんのな……とか思ってた、どうでもよくなった。俺の顔じゃ恋人どころか友達だって無理だし、部下だって何人慕ってくれるか」

「なるほどー……」

いやなるほどじゃねえよそこは否定しろオイ。

ま、それよりも仕事仕事。さつさと終わらせて定時で帰って、ガキどもの面倒を見るのだ。

んで、変顔のおじちゃんでも多少の安心は与えられるのだと、多少の満足感で自分を満たし、やがて死ぬのだ。

……。

そんなわけで仕事を終えて、買い物をして、家に帰る。

今日も今日とて変顔のおっちゃんとして迎えられて、食事を作って、一緒に食べて。

「おっちゃんウマイ！」

「おじちゃん、おいしー！」

「はっはっはっは、この野郎この女郎」

結局。

俺は、俺には、こんな人生しか残されていない。それがわかった。わかつちまった。

これからなにかをすれば劇的に変わる？ 馬鹿言え、それは人生の終わりだ、劇的に変わるんじゃない、馬鹿みたいに終わるんだ。

交通事故に遭いました。死ぬんだなあなんて自覚して、最後に思ったのは結局ツラなこと。ほら、俺の人生なんて結局それに左右される。

はあ、ほんとくつだらねえ世の中。

だからさ、もういいって思えたんだ。

スツキリした顔になった？ そりやそうだ、夢も希望も諦めた。 ”自分の時間”も諦めた。

俺はこうして姉の我儘に振り回されて、自分の時間も削られて、給料だってこいつらのために使わされて、今際の際に自分を振り返って、自分の顔に振り回されるだけの人生だったって泣きながら死ぬ。ドえらい誰かは言った。人間諦めが肝心だって。

諦めた先には何があるかって？ つはは、他人の幸せに決まってんじゃねえか。誰かの不幸は他人の幸せなんだからな。

だから……

「だから」

「？」

「おっちゃん？」

だから、俺の不幸でこいつらを幸せにしてやろう。手始めはそれでもいい。

俺はもう諦めた。だから、それでいい。

あんな簡単に俺の人生なんて潰れるんだってわかつちまった。もう、いろいろと諦められちまった。だから、いい。

ははは、なんて薄く笑って、ふとどんな顔で笑ってんのか気になって、玄関にある鏡を覗いた。

そこには、ハイライトなんぞ無くなったドス黒い目をした不細工が居た。

「……………」

うん、キモいわ。

ぶっさいくやわあ。

そうして俺は、ちいっとばかり残っていたプライドも、ドブ川に捨て去ることが出来たんだと思う。

ハイライト消えたまま自然に微笑むことが出来た。もうなにも怖くない。

さあ覚悟しやがれガキども。俺の不幸と財産で、貴様らを立派な青年に育て上げてくれるわ……!!

……と、その前に。

「ええつと……、んー……あ、もしもし姉貴ー？」

『ちよ、アンタなんで今まで連絡もなくっ……!! 大丈夫なの!? あ

の音なに!』

「うっさい黙れ。ちゃんと会話しろ会話」

『むぐっ……! じゃ、じゃあ。アンタ、大丈夫なの?』

「世間一般的に言えばいろいろ手遅れじゃないか?」

『なっ……ちよつとアン——!』

「うっさい黙れ。ちゃんと会話しろ会話。なんでも叫ぶなやかましい」

『~~~~つ……アンタって……!!』

「五体満足だよ。近くで衝突事故があつてケータイ巻き込まれて今まで使えなかつたんだ」

『へ? そ、そうなの? そりやまた……えと、ごしゅーしょーさま?』

「ガキどもの食いもん買いにいった所為だから、もろもろの代金いつか請求すつからな」

『あーはいはい、好きだけしなさい。可愛い子供に会えない分、お金だけは稼いでるから。対価でもなんでも、好きだけ持ってけこのやろー』

「……」

手遅れって部分にツッコミはないらしい。まあ、五体満足でも精神的にアレなだけなんだが。

あー……未練か。いい、いい。そんなもん捨てとけ捨てとけ。まだ誰かに気にしてほしかったのか。くっだらな。

「姉貴」

『んあ? あによ』

「なによ、だろそこは。あーその。……頑張れな、プロジェクト」

『ま、自由にやるわよ。あんたも子供たちのこと、泣かせたりすんじゃないわよ』

「子供に泣くなつてのは無理だ。てかもう泣かせた。子供にや悪いと思つたがあんたにや悪いとは思わん」

『……んつといい性格してるわね我が弟ながら……!』

「わかつてるくせに俺に預けたのは姉貴だろ?」

『ああはいはいっ、わあつたわよ！ ……で、で、だけどそのー……結衣に雄大は？ 声とか聞かせ——』

「聞かせるわけねえだろうがなに甘えたこと言ってたんだプロジェクト頑張れつつってんだこのタコ」

『やああああだああああっ!! 声聞きたい声聞きたいっ!! このままプロジェクト終わるまで声も姿も聞けないし見れないなんてヤアアアアア!!』

「……………姉貴」

本気の本気で声が枯れるような号泣ボイスを出す姉に、俺はそつとやさしい声をかける。

と、ぐずぐずと泣き声が聞こえるケータイの先から、少々の期待が宿ったような吐息が聞こえ——

「それ選んだのはためえだろうが甘えんなクソが」

『うわああああああああああんっ!!』

その甘えた根性に唾をかけるようにド正論を投げた。

なんぬかしよつとかこんげらんこつっ。

「あ、結衣とユードアイこつち来たから切るな」

『それ逆じゃないの!? 代わって!? 代わってよう! 代わりなさい!!』

「代わってほしい?」

『ほしいほしい!』

「どうしても?」

『どうしてもどうしても!!』

「だめだ」

『アンタはどこぞの世紀末七ツ星救世主か!』

つくづく思うけど、北斗の拳の主人公に愛を取り戻させるのは無理があると思う。だって無慈悲だし。

「んじゃ、旦那さんよろしく」

『なっ、ちよっ、お願い一言だけでいいからっ!』

「結衣ー、ゆるだくい」

「えー?」

「なにになにおつちやーん！」

「はい聞こえたな一言」

『アンタちよつとマジふざけんじやないわよそれ一言っていうか聞こえただけじゃないのいやちよ待って待って話させ』

悪は去った。むしろ切った。すぐにかかってくるけど知りません。

「？ おじちゃん、お電話？」

「誰からだー？」

「モンスターザクロパス」

「ざくろぱすー！」

「ざくろぱすー！」

姉がザクロパスになった瞬間であった。誰だよ。

3：因幡雄大―いなばゆうだい

一年が経った。

「おじさん、これやつとくねー」

「おう頼んだ。ユーダイ、そつちどうだ？」

「これくらいおつちゃんやつてくれよなー。めんどつちいぜー」

「はいはいはい、覚えたばっかの面倒くさいを前面に出さない出さない。むしろ楽しむ方向を前に出していいこうな」

「そつちのが楽しい？」

「そりやそうだろ、なにかやるってのは楽しいもんだって覚えろ。だって、やらないこと」って楽しくないだろ？」

「……だなっ！ よーしやるぞユイー！」

「わたしもうやつてるよう」

一年が経った。

「おつちゃんつてほんと体力だけはあるよなー」

「鍛えてるからな」

「仕事とか大丈夫ー？」

「任せとけ、結衣ちゃん」

一年が経った。

「あつちいいい……！ おつちゃんこの暑さなんとかならねえ……？」

「おつちゃんGODじゃねえから天候までは変えられねえんだよ……」

「叔父さん、ユーダイ、そんなところで寝てたら風邪引くよ？」

「この熱さで引かせられるもんなら引かせてみろってんだい……なー、おつちゃーん」

「屁理屈こねなさんな。確かに女の子が居るのにこの格好はないな、よし、風呂入ってくるか」

「えー？ 余計汗かくだろそんなの」

「そーでもないぞ？ 風呂でおもつくそ体あつたためて体洗つてな？」

そんでもって出る前に軽く冷水で体冷やすんだ。効果は長くは続か

んけど、なんかちよっぴり涼しさ持続するぞ」

「ほんとかよー……んじやちよつとやってくる」

「待て、おじさんが先だ」

「おつちゃん大人なんだからそんなくらい我慢しろよ！」

「ばかお前馬鹿暑いだろ年齢とか関係なくばかお前馬鹿」

「馬鹿馬鹿言うよお!!」

「あははははは！」

一年が経った。

「おつちゃん！ どうすれば早く走れるようになる!?!」

「よっしやあ特訓だ！ 今日から早速やるぞ！」

「おおよ特訓だ！ ユイも混ぜれ！」

「え、ええ？ また急に？ わたしはいいよう」

「ばつかお前、お前だって足遅くてどんくさいとか言われてたろ！

早くなるんだよ今日から！」

「叔父さんはそれも個性だって言ってくれたもん！」

「結衣ちゃん、それでも速くなりたいなら、叔父さんその意思尊重する

ぞっ。」

「うー……速くなれる?」

「なれるなれる」

「じゃあ……」

一年が――

……。

で……。

「あのなあ姉貴……プロジェクトプロジェクトって、何年それに付き合ってたんだよ」

『うっさいこつちが訊きたいわんなこと!! ね、ねえちよつとアンタ

? ねえ? ちゃんと二人の記録取ってあるんでしょうね。これで

無いとか言ったらブツ殺すわよ? ブツ殺よブツ殺』

「二人とももう親のこととか忘れてんじやねえかいっせ」

『やめれ』

「おうやめる」

えらくドスの利いたやめれだった。

『ていうかなんなのよ！　なんでアンタはこっちに写真のひとつも送らないの!?　二人とももう18でしょ!?　どう育ってるのかもわからないって、親としてどうなのよー!!』

「それ以前にお前が親としてどうなんだ。十年近くだぞオイ」

『ひぐつ……?!?』

「実の親だからそうならなかったのかどうかは知らんけど、反抗期もなく良い子に育ってるぞ二人とも。家の手伝いはしてくるし、困ったことがあると全力で支え合ってくれるし」

『いいなー！　いいなー！　いーいーなーあー!!』

「切るぞコラ」

『なんで!?　う、羨ましがることすらもう許されないうつての!?　実の子供の成長を近くで見守ることも、おべんと作ってあげることも娘に料理を教えることも出来ない親の気持ちがあんたにわかる!?』

「知らん。だって姉貴料理できねえし」

『――』

黙った。

マジか、向こうでも料理勉強しなかったんか。

これ、宗次さん（旦那さん）大丈夫なのか……？

「ところでさ」

『ぐすつ……なによ』

「結構前の話だけど、たまにそっちから子供の笑い声とか聞こえてたんだけど。あれなに？」

『ひぐつ?!』

「……………」

『……………』

「……………おい。お前まさか」

『いやっ……や、いややややだっただだだっってほらっ、プロジェクトプロジェクト言ってもまだまだ若い男女だったしっ!?　いろいろ鬱憤も溜まってたし、ご無沙汰だったこともあってそのっ……』

「……………」

『……………さつ……………三人目……………おります』

「さようなら、お子さん二人は俺が育てます」

『わあああ待つて待つて違うのほんと違うのもともと三人は欲しいねって話でそれで最初っから双子だったしでもどうしてもああああ待つて待つて話聞いて待』

悪は去った。

溜め息ひとつ、通話が切れたスマホを耳から離して視線を落とすと、まじかー……………と長い溜め息。

や、実際プロジェクトはまだ続いているらしい。だがマジか、向こうで子供作って、その面倒見ながらやってるって。

これ俺別に頑張らんでもよかったんじゃ？ だって向こうで子育てしながらプロジェクト出来ちやつてる証拠があるわけじゃない？
「……………」

ああいや、そういうわけでもないか。

姉貴だつて宗次さんだつて、向こうの環境に馴染むまでは大変だったんだろう。

プロジェクトだつて軌道に乗るまでは、なにも手に着かない状況だったに違いない。

だから、ここで俺が怒るのも呆れるのも筋違いであつて、なにより俺はいろいろ諦めたのだから。

なんとかなるさ。

「叔父さん、誰かと電話？」

「お、ユーダイか。お前のお袋さんと」

「お袋？ あ……………」

実際のところ、ユーダイも結衣も親のことは随分と薄れてしまっているらしい。

苦勞しながら育ててくれたのは俺だ、みたいな認識になっているらしく、踏み込んで訊いてみたところ、「たとえばならほら、男と一緒に駆け落ちして、全部を元旦那に押し付けた女……………みたいな？」らしい。

姉貴と俺が元夫婦だったって設定はともかく、似たような状況だから笑えない。

「けどさあ、ほんと呆れるよな。叔父さん顔はあれだけど、ほんとすつげえいい男なのに、なあんで今まで女の影のひとつもなかったんだろうな」

「ダルルオオ？ 今時俺レベルでいい男なんざそう居ねえぜえ？」

「はははっ、そうそう、俺の馬鹿なノリとかすぐノってきってくれるとか最高なのになー。シンも言ってたよ、叔父さんみたいなおもしろえ人が身内に居りゃよかったのにーって」

「ちなみにお前の周りの俺の認識って？」

「顔はアレなのにすげえ面白い人」

「やっぱなー、やっぱなーあああ……顔だよなー、顔は絶対話題に出ると思っただよー……」

「ぼつかだなあ叔父さん、叔父さんがそんな顔じゃなきや、こんなおもしろー叔父さんな性格じゃなかったって絶対！」

「アホかお前アホお前俺はお前事故に遭って死に掛けたからお前アホお前」

「叔父さんって照れると大体そうなるよな」

「ぼつときなさい」

苦労がなかったわけじゃない。むしろありまくりだった。

それでも今まで頑張ってたのは、こいつらが居たからだ。

ほんとアホな話で、苦労ばつかの時は泣きたくなることばつかだったのに、諦めて自分の不幸を他人の幸福にするよう動き始めてからは、そう不幸でもなかった気がする。

最近知ったんだが、周りが幸福になるってことは、自分の環境も幸福になるってこと。気づこうとしなかっただけで、そういった行動は自分にも少なからず幸福が滲んでくるようになるってことだった。

ただしその速度があまりにも遅すぎて、10年近く経たなければ気づくこともないってアホさなわけで。

「……………ところでユーダイ。お前ほんつとーに賛成なのか？」

「はあ、まーたそれかよ叔父さん。いーじゃん、ユイがそれでいいつつってんだから。俺だって叔父さんのこと、叔父さんってよりは親、っていうよりも兄貴って感じだと思っただから」

今更だよ今更、なんて言ってくるが……ああ、もう。

「よく見ろこの顔。なんでこの顔に惚れるんだよ。俺この歳まで女に引かれることはあっても惹かれることはなかったんだぞ?」

「? ……ああ、引かれると惹かれるね。俺の姉がそういう特殊な方向だったってことだろ。顔より心。惚れたら負け。そういうことだろ」

むしろ噂のかーさんが、そんな関係知ったらどう出るのが楽しみだよ俺! ……なあんて言っつて、目の前の心が雄大なユーダイは笑っている。ちくしようめ。

まあ、わからんでもないんだけど。押し付けて十年ほったらかした娘が、よもや弟に惚れました、なんて。

ここ数年で立派に成長し、あの外見だけは見目麗しい姉から産まれたと納得できる外見と、あの姉から産まれただなんて信じられない性格の娘、結衣は、なにをどう間違ったのか俺に結婚を前提に付き合ってくださいなどと言ってきた。

ユーダイレベルのジョークか? よろしいそのギャグ受け取ろう、と馬鹿真面目な顔で「俺も……そう思っていたのさ」なんて返したら、花咲く笑顔と潤んだ瞳で迎えられた。

……ハツと気づいた時には全てが遅すぎたのだ。アホである。

そう、あれは確か——

4：因幡結衣―いなばゆい

〓〓〓／回想

それは九月だった。怪しい季節だった。

嘘です、十月の、夏の暑さもお彼岸が過ぎたあたりから忘れられていった、涼しい頃合だった。

仕事も順調、休日ってことで今日はどうしようかな、なんて思っていた日。

顔を洗って歯も磨いて、冗談めかして鏡に「今日も決ま^フつ^サてるぜ^{イク}だ

と頷いてみせると洗面所を出る。
それからどうしようか……なんて考えていると、リビングで結衣ちゃんが待つていた。

休みの日は一緒に食事を作るのが恒例となっている。そのため居たんだろう。最近はお所に一緒に並んで立っていると、どこか気恥ずかしそうにしたり顔を赤らめたりと表情豊かになったな、なんて思っていた俺なのだ。

「あ、あのっ」

「ん？ ああ、おはよう結衣ちゃん」

「おはつ、おはようございますっ！ ……」
「？」

結衣はおはようを大事にする。

おはようからおやすみまで、なんでかきつちり俺に言ってくる。良い子に育った。掛け値なしにそう言える。

たまに「馬鹿な……本当にヤツの娘か……!?!」なんて疑いたくもなるが、まあ宗次さんの血のお陰なのだと思うっておこう。

でも、なんでか挨拶した時とか、声をかけた時とか、赤くした顔を俯かせて、目をぎゅーって瞑って震えてるんだよな。こう、スカートぎょうくって握り締めて。

昔っから長い大人し目な服を好んで着ていたのに、中学の何年かから急に、ちよっぴり大人な感じの服を着るようになった。

な、割りに、俺に見られると顔真っ赤にしてあわあわして、そのた

んびにユードイに “はあく……” と溜め息を吐かれていたりした。
あの時はついに反抗期が……!? なんて思ったりしたもんだよ
なあ。

や、反抗期は来たには来たぞ? 自分らをずくつとほったらかしに
した親に向けて。なもんだからその分俺が思いつきり愛情と親愛を
注いだら、いつの間にかかなりべったりになった気がしなくもない。

「ああそれと。……誕生日おめでとう。結衣ちゃんも18歳か」

「ふああっ……!? あ、あの、あのあのっ……はっ!? そ、そうですっ、
18歳ですっ! もう大人ですっ、大人なんです!」

「え? あ、ああうん、そうだな」

……結婚出来る年齢っただけで、大人かどうかで言ったら20が青
年っただけだな。ほら、未成年者の喫煙と飲酒は法律で禁止され
ております、なんてよく聞かし。

けど今はそれ言ったら泣かれそうな気がするのでやめておく。

「だからそのっ、いつまでもちゃん付けとかそのあのよくないんじや
ないかなあつて」

「そうか? 可愛くていいと思うんだが」

「かわっ——………だだだだめですだめですっ! きよきよ
きよ今日こそは、今日からはっ! 絶対によびっ……呼び捨てにして
もらいますから!」

「………もしかしてちゃん付け、嫌いだった? あちやー、そりや叔
父さん悪いことしちやってたな」

「叔父さんは悪くなんかありませんなにを言い出すんですか!!」

「え、えー……どうすりやいいの」

顔を真っ赤にして身振り手振りも加えて怒られた。涙目の女性の
怒鳴り声って、怖いよね。

「とにかく叔父さんっ! ちゃんはだめです! 呼び捨ててください
いっ!」

「だめ?」

「だめです!」

「絶対に?」

「絶対にです！ たとえそれがお誕生日プレゼントになっても構わない覚悟で挑みます!!」

因幡結衣。髪型はさらっさらの黒髪ロングボブ。

性格は控え目かと思いきや、中学の頃に結構大胆になった。ただし感情の起伏で涙が滲みやすいというかテンパリやすいというか。

スタイルは……男が見たら10人中10人は振り返るんじゃないでしょう。もちろん顔の良さも手伝って。

胸、大きい。腰、スラツと。お尻、安産型。

こんな娘がいつか、彼氏とか連れてきて挨拶するんだぜ……？ マジか、泣きそう。いやいや俺が泣いてどうする、俺いろいろ諦めたでしょーが。

だから俺がすればいいのはひたすら受身で、なんでもかんでも叶えてやることだと思ってる。

さ、ならば俺がすることは一つだな？

「じゃあ……結衣」

「ひゃうっ」

ひゃうって言われた。

さつきまでのきやーきやーな勢いが一気に削がれ、ぽふんつと顔を赤というより桜色に染めると、もじもじと縮こまっていき……両頬を両手で包んで、目をぎゅうぐつと閉じてしまった。なんか「ぐぐぐ……っ」と声にならない声で震えてる。

無理矢理声にするとするなら、ぎゅういういうううう……!!

“みたいな声だな。何語だ。

「さて、んじゃあ今年のプレゼントはなににしようか。欲しいものとかあるか？ 毎年言ってるけどおじさん、そういうプレゼントとかを選ぶセンスとかななくてなあ」

「……………」

「結衣ちゃ……こほん。結衣？」

「……………」

訊ねてみると、すう、と目を開き、ぽやくつとした、というか……とろんとした？ 目で俺をぽくつと見つめてくる結衣。

桜色の頬と、涙が滲みながらもとろんとした目と、何故か頬を包んだままの両手。

おじさん女性の表情でそんなの見るの初めてなんです。え？なにを表現したいんだ？俺とくれば、目が合えば「キモい・怖い・生きた芸術の森（ゲテモノ）」だった筈なんだが。

あーそうそう、俺が高校の頃なんて、女子高生なんて口を開けば「キモい・ウザい・死ねば？」の三種しか喋らない珍獣みたいなものだった。心の中でのあだ名が「キモウザ・シネーヴァさん」だったくらいだから、ほんととそれしか口にしないうほど、あの頃の女子高生つてのはキモウザ・シネーヴァさんだった。

それに比べて……宅の結衣は本当に良い子に育ってくれた。

そんな彼女に贈る誕生日プレゼント。多少の無茶はしようとも贈りたいと思うのだ。

「あの」

「おう」

「なんでも……いいですか？」

「俺に出来ること、買えるものならな」

「ほんとですか……？」

「ほんとほんと」

「命、懸けますか？」

「物騒だなオイ。まあ、本当に出来ること、無茶じゃないことならいいよ」

「じゃあ——」

ふるるっ……と足を、腰を、肩を震わせ、彼女は桜色大満開の表情で涙を散らしながら、言った。

「わたしとっ……結婚を前提に付き合ってください——！！」

「いや無理だから」

そしてこの即答である。

「なななななななんですか!? 叔父さん嘘ついたんですか!？」

「いやいやつきません叔父さん嘘など大事な時につきません。……あのね、叔父と姪はね、法律上で結婚できないの」

「!？」

「いや、!? じゃなくて。え? 今どう発音したの?」

あ、それ言ったら俺もか。え? 俺今どうやって?

とかなんとか考えてたら、目を渦巻状にして俺をヴィスイーと指差してきた結衣が、

「じゃあいいですわたし結婚なんてしません一生独身でいてやるんですからねぜんぶぜんぶおじさんの所為ですから!」

「え? いや、結婚するかは本人の自由だろ。誰の責任でもないし、俺は止めないぞ?」

「だったら未婚の夫婦になってください!!」

なぜ そうなる

ぴしりと我が身が固まった。

あいや待たれいと手を伸ばしかけると、その手がハッシと掴まれて、引つ張られて——もにゆり、と。彼女の豊かな胸に押し付けられた。

「オアツ——!？」

「わわわわわわたしっ、本気っ、本気ですからっ! なんですか結婚なんて! 紙に名前書いて提出するだけじゃないですか! 大事なのは愛ですもん! ウエディングドレスなんて! 白無垢なんて!!」

「おわわわわちよ待て離せ離せこんな誰かに見られたらっ——」

なんとか強引に離そうとするも、そのたびに腕がぎうつと圧迫され、手が勝手に開閉というか、グーパーを繰り返しまして。そのめっちゃやわこい! アワワワ女の子の胸ってこんななんだ! じゃねえよ! やめて!? いろいろ諦めたとしてもこんな方向への諦めなんて抱きたくない!

「おじさーん、借りてた辞書、返しに——あ」

「あ、っ……」

「あうんっ……!」

と、そこへやってくるユーダイ。OH、YOU DIE。いやこの場合死ぬの俺だよ。

てか結衣も! なんでこのタイミングで甘い声出してんの! 咄

嗟に手をずらそうとして力んで驚掴みしちやったからですねごめんなさい!

「え、あ、いやー……叔父さん、マジ? OK出したの?」

終わったー、なんて思っていた俺に、ちよつと半笑いのような顔で問いかけてくるユーダイ。

エ? 笑ってる? あれ? 悲運! 叔父に襲われる双子の姉

!“みたいな状況は?”

………え? もしかしてこれ、超体を張ったジョーク?

………あーあーあー! そういや結衣めつちやテンパってたし、多分ジョークの順序忘れちゃって、なんとかしなくちゃって暴走したんだな!?

なーんだそうかそうか! そうだよなあ! じやなきやこんなヴサイクおっさんと結婚を前提にとかウハハハハちつくしよう騙されたあああああつ!!

「ユイも本気で踏み切ったんだな……でも胸掴ませるのはやりすぎじゃね?」

「え? あ……はわあああつ!」

そしてさらに赤くなる結衣。うんうんやっぱりテンパリすぎての行動か。

予定になけりやあそりやあユーダイだつて驚くわ。

大丈夫だ、叔父さんもう受け止めるよ。結衣ちゃんはたぶん、何を言ってもおじさんが「いーよ」って受け入れてみせるから、どこまで行けるか試してみたくなっちゃったんだろう。

だったらその期待に応えてやらなくちゃ。

そして、”もー、おじさんはー、あははははー♪”って感じで舞台が幕を閉じるのだ。

………。

ところで、この手はいつになったら離してくれるのでしょうか。

いや、結衣? 腕の筋を圧迫して無理矢理揉ませないで? 顔真っ

赤にして目え渦巻状にしてなにやってんですか。

「ほじっ……おじひゃんっ……」

「お、おう……う？」

「すー、はー……！ おじさんっ！」

「お、おうっ」

「わっ……わたしとっ！ 未婚の夫婦になってくださいっ!!」

「……………」

どごーんと、言葉が衝撃波になったかのように俺を襲った。

そんな中、俺はクールになれクールになれと自分に言い聞かせる。不細工な俺が誰かに好かれるなど。冗談でもなければ有り得ない。それに相手は将来有望であろうめちゃんこ可愛い姪っ子だ。俺なんぞ、からかい相手の経験値にしかならんだろう。

ならばそのからかいを真正面から受け止めて、笑いの種にしてやりやいい。

そうだ、諦めたおっさんは手強いってことを思い知らせてやろう。

だから俺は掴まれている手とは反対の手で結衣の肩をぐっと掴んで、精一杯のキメ顔を作って返すのだ。

「俺も——そう思っていたのさ」

「……………っ！ おじっ……………じゃ、じゃあっ！」

「ああ。結衣のお願いを受け入れるよ。おじさんと未婚の夫婦になるう」

傍から見ればもうギャグ空間にしか見えんのだろうなー、なんて思いながら、鉄のフォルゴレを意識したサワヤカスマイルを披露する。するとどうだろう、ようやく俺の手は解放されて、結衣は両手で口元を塞いで震えだした。

え……両手で押さえなきゃやばいくらい面白かった？ 吹き出しそう？ などと思っていた俺に、涙をこぼした結衣ががばしーと抱きついてきたのは、直後のことでした。

5：笹村絵里―ささむらえり

―――おじさん

で……。

「まさか直後にキスされるとはなあ……」

「俺もまさか、双子の姉と叔父のキスを、ファーストセカンドサード、拳句にデープまで一気に見させられるとは思わなかったよ」

そう、結衣は本気だった。本気で俺のことを好きになっていった。

聞くに、なんでも小学の頃に好きになって、けど初恋は実らないなんて言葉を知って、一度諦めた。

しかし諦められず想いを膨れ上がらせた中学。人の“好き”は四年で枯れる、なんて言葉を知って、小学から数えてもうすぐ四年……という事実打ちひしがれて、再び諦めた。

そして高校。四年経ってもますます好きな気持ちを胸に、三度……と思うも、好きすぎると飽きて離れるのが多いことを知り、試しにべったべたに近寄ってみるも、最高学年になっても惚れたままの自分に自信を以って、18の誕生日に突撃。

結果……お嫁さんにはなれないけれど、未婚の夫婦にはなりたいたいと思っていた、なんて俺の言葉をすっかり頂き、実はすっかりスマホで録音されていたらしい俺は、もはや逃げられない場所に居たわけで。「姉貴になんて言おう……」

「なにも言わなくていいんじゃない？ 10年も帰ってこないんだぜー？ 法律は守ってるし問題なんてないない。大事なのは叔父さんとユイがどう思ってるかじゃん」

「……………」

「あ、ところで叔父さん」

「お、おう……？ どうした……？ おじさん、ちよつと現実を見るのが怖くて……」

「俺、今付き合ってる人居るんだけどさ。紹介していい？」

「ちよつとまて」

「わざわざ小文字まできっぱり言わなくていいから。いい？ だめ

？」

「ばかお前馬鹿お前なんでそういうことばかお前こんな時に馬鹿お前」

「いや、ちよーどいいかなくて。俺の好きな人も歳離れててさ」

「——ホイ？」

「いやちよつと待て。歳の離れた？ こいつ学生よ？ どこでそんな人と？」

「……マテ。待て待てまさかまさかつ……!？」

「っへへー……女教師♪」

(ア、ア、アアアアアアアツ!!)

白い歯を見せながら笑う、いたずら小僧みたいなイケメンがそこに居た。

ああ……俺が育てた双子は、どうやら二人とも年上が好きらしい。

「おん前そういうことこそ本当の親ダルルオオ!! 俺に言つてどーすんだ! どーすんだほんともー!!」

「だって親つて言つても海外だし。叔父さんなら俺の兄貴分つて感じだしさ。俺、親よりも叔父さんに許してほしいんだよ。たぶんそれはユイも一緒。他の誰でもなくて、おじさんに認めて欲しいんだ」

「っ……お、お前つ……お前も結衣も! そういうところだぞほんと! そんな無邪気な顔でそういうこと言うからバカお前ほんとお前馬鹿!!」

「あつ、俺今の『そういうところだぞ』って言葉嫌いだったけど、叔父さんののは好きだな。ちゃんとどういうところなのか教えてくれるところ、ほんと叔父さんいい人だよな。顔はアレだけど」

「だあつ! もう! ほつとけ!」

どうしろつてんだ。会えばいいのか。それだけか。

教師が恥ずかしがりながらお宅のお姉さんの息子さんとお付き合いを……とかいや知らんよ! どんな紹介だよ!

え!?! それに対して俺、『こちらも宅の姉の可愛い娘と歳の離れたお付き合いをしているのですよオ、ヴェエ、フエフエフエフエ、へへへへへへへ?』なんて千年公チツクな笑いとともになんて!?

いや千年公チックの笑いは余計だけでも！ 滝口順平さん大好きでした！ 今も大好きです！

「はあ……わかったよ、連れてこい。ていうか、俺が会ってどうすればいいんだよ」

「え？ 賛成か反対か決めてくれるだけでいいよ。ほんとそれだけでいい。俺が惚れてる先生も、保護者の方がくとかそれが壁になってるみたいだからさ」

「はあ……そっか。わかった。ちなみに相手はなんて名前？」

「笹村絵里って名前」

「」

あれれーおつかしいなー、おじさんが大学の時に家庭教師に伺ったおじさんとおんなじ名前だぞー？

……まさか。

「笹村っていうのかー。なんか左目に泣きボクロとかありそうな名前だよなー」

「え？ おじさんなんで知ってるの？」

「もうやだこの人生!!」

教え子が甥とデキてました。挨拶に来るそうです。仕事、残業で帰ってこれない、なんてことにならねえかなああ……!!

……。

……。

「」

「……………!!」

で、ほんとに居た。

仕事から帰ってきたら、まだこたつにはなっていないこたつテーブルに、スーツを着た女性。

かちんこちんに緊張しているそいつはきつちりとあの頃の面影を残して、そこに居た。

「なになっ……な、なになんてここに先生が!？」

「おいやめろ」

どっかの漫画のタイトルになっちゃうだろが。

むしろ俺がお前に言いたいわ。お前今教師だろが。なんで甥が恋人紹介する場面でお前なんだよ。なんでここに先生がつてお前のとだお前の。

「あー、笹村、久しぶりだな。俺がお前の家に家庭教師しに行つてた時以来か」

「あわわわわ……！ え、そんな、まさか先生の息子さん……!? でも、だつて苗字が……!?!」

「あのな、俺が結婚なんて出来るわけないだろが。姉の息子だ姉の」

「あ、お姉さんの！ なら納得です！ そーですよね先生ですもんねー!」

「おいこら」

言葉に遠慮がないのはあの頃のままらしい。

まあいい。

「で、ユードイと付き合つてるんだっけ？」

「ひうつ!? ハ、ハワワ……！ あ、はい……あの、ユードイ、くん、とは清い交際、を……!」

「こいつ大人しい顔して結構強引だろ」

「そうなんですよう!! 私が戸惑つてるのをいいことにどんどんぐいぐい！ 氣づけば一緒に勉強したりおべんと食べたりデートしたりっ!! どういう教育してるんですか先生っ!!」

「そういうお前はこういう教育したんだ？ ン？ 笹村」

「ひうつ!?!」

真っ赤だつた顔色が一変、真っ青になった。

俺か？ 俺は自分を犠牲にして幸福にしようとしただけだ。あとは知らん。

「まあお前のことだから、普段はピシツとして主導権握つてんのにどうしようもないところでポカやらかして、誰も見てないところで『うえーんユードイ』とかドチャクソ甘えてんだろ」

「なんで先生がそのことを!?!」

「ユードイ、あとで家族会議なー」

「うわっ、とばっちりっ!? ちよ、先生しゃんとしてくださいよっ!」

「無理だもん！ 私口で先生に勝てたことないもん！」

「そんな簡単に諦めないでくださいよ！ そんなポンコツなところに惚れたんだけどもー！」

あー……うん。ユーダイのやつ、弱った女の子とかほつとけないタイプだしなあ。」

そんなことの延長で心が本気モードになってしまったんだろう。

「うー……いー。なんですかさつきからこつちをおちよくってばっかで……！ 先生！ わたしちゃんと挨拶に来たんですよ!? もう大人なんですから大人の対応をしてください！」

「じゃあ近所のザーマスおばさまにこのことを報告して、常識的に考えてOKももらえるか試してみるか」

「やめてくださいなんてこと言い出すんですか先生は私を泣かせて楽しみたいんですか!?!」

「おーい、大人の対応……」

本気でするつもりないからちよつと落ち着きなさいっての。

「うう……あの。先生もやつぱり、歳の差カップルとか……嫌うタイプなんでしようか」

「ん？ アホぬかせ、本当に好きなら結ばれるべきだろ。そんなん本人同士の問題だ。親がするべきなのは、結ばれて本当に幸せになれるのかどうかの判断くらいだろ。だから一つ。ひとつだけだよ笹村。……お前は、ユーダイと幸せになりたいか？ なりたくないか？」

「っ……いー。先生……いー！」

「5、4、3、2、1——」

「ほんと先生ってそういうところ変わってませんね!? ここ急かすところですか!? 好きです、本当に好きですからお付き合いを認めてくださいお願いします！」

「最初っからヘンな意地とか屁理屈抜きにそう言え、ばかもの」

「うう……先生だって教師と生徒、なんて歳の差がある好いた惚れたを経験すればこうなりますよう。私、先生なんですよ？ 気づいたら好きになっちゃってて、ふとしたときに考えてるのがユーダイくんのこと、頭の中から振り払おうとしたら本人に声かけられて、つて

「……」

「ふ、ふーん」

「なんですかふーんってー！ 真面目に考えてください！ たとえばですよ!? 双子で同じクラスの因幡結衣さん！ さつきから黙ったまんまですけど、その子と先生が付き合う、なんてことになって、お姉さんに挨拶するなんて段階になったとしたら、きっと先生だって同じ気持ちに——!!」

「「ぶっふおおっ!!」」

「なつて——……ええ?」

「……」

「……」

「……」

「あの……先生?」

「……」

「……」

「……」

「ユーダイくん? 結衣ちゃん?」

「……」

「……」

「……」

「え? え? ——ええええええええええええつ!!」

沈黙は肯定ナリ。

笹村絵里は絶叫し、どういうことですか先生!! 先生いいいい!! と叫びながら俺の胸倉挿んでがつくんがつくん。

「ししししし信じられません! え!? さつきまでキリツとした不細工顔でいろいろ語ってたのに既に歳の差カップルなんですか!? というかあの先生!?! 叔父と姪は結婚できませんよ!?! え!?! 遊びなんですか!?! どうなんですか先生!!」

「あー、姉貴ー? お前の息子がなー、最低最悪の性格の女教師にたぶらかされてなー」

「きゃあああああああ嘘ですだめです私にも見てません聞いて

ません!! うそですからお義母様わわ私はー! ってこれ通じてないじゃないですか!!」

「とりあえず落ち着け笹村……恋人の意外な一面を見て、ユーダイが尊い顔してるから」

「ひうつ!? う、うぐ、うー……!!」

「見られて恥ずかしいけどユーダイに喜ばれるのが嬉しい複雑な乙女心であった」

「先生ツ!!」

相変わらずわかりやすい。こいつはあの頃からこうだった。

きつと学校の方でもとつくにバレにバレて、黙認されとるんだろくなあ……。

ちらりとユーダイを見て、疑問を飛ばすような仕草を見せれば、苦笑して肩をすくめられた。バレバレらしい。

「まあ、そんなわけだから俺から止めることも妨害することもないよ。好きになったんならその気持ち、大事にしろ」

「……なんか納得いきませんが。はい、ありがとうございます、先生」

こんな言葉でも安心は得られたのか、ほうと溜め息を吐く笹村。

しかしそれはそれとしてとばかりに、ソソツと俺の方へ回り込んできて、小声で話しかけてくる。

(あの……先生? とところで先生はどうやって結衣ちゃんと……?)

(だよな、気になるよな。俺もそこが不思議でしょうがない。だってこの顔だぞ?)

(えっ? 先生が強引に言い寄ったんじゃないんですか?)

(PTA召喚するぞこら)

(やめてくださいいごめんなさい!! って、それ先生も困るやつじゃないですか!)

(ただの仲良し叔父姪だって言う。お前は?)

(~~~~~!! 先生いじわるです! 先生はいじわるです!!)

涙を散らして俺をゾスゾス人差し指で攻撃してくる元生徒。

俺から仕掛ければセクハラになるので反撃出来ないのが辛い。て

いかかユーダイ、その尊い顔やめろ。

「で、だ。笹村」

「むうっ……な、なんですか、先生」

「お前さ」

「はい」

「……結衣のこと、姉さんって呼べる？」

「っっ……!! いじわるううっ!!」

散らした涙が再び目じりにたまり、そしてまた散った。

結衣は結衣でなにやら頬を支えるように手で包み、女の子座りでペたんとしたまま「え、え？ お姉ちゃん？ わたし、先生のお姉ちゃん？ え？」などと言っている。

「あの。あーの、おじさん？ 俺の恋人あんまりいじめないで欲しいんだけどー……」

「緩んだ顔で言われてもなあ。そんなこと言ってお前、顔に『知らなかった恋人の顔見せてくれてありがとう』って書いてあるぞ？」

「うえっ!? ナ、ナンノコトヤラ……っあ、いや先生!? ちがつ……くないけど、誤解っ……でもないけど、可愛いからっ！ 綺麗だから！

惚れ直したっていうよりさらに好きになっただっていうか！ だからその、顔真っ赤にさせたまま涙目でゆっくり手を上げて近づいてくるとかつ……あ、あっ、あーっっ!!」

恋人ゲンコツがユーダイを襲った。ナイス、笹村。

6：八十島芳樹―やそじまよしき（再）

さて、と。

「第72回、姉貴定期報告」

「「うわああああい……」」

俺の小さな掛け声に、絶望顔で拳を弱弱しく上げる人3人。

時は冬、場所は俺の家、つつーか祖父母の家、だな。親も祖父母もとつくに居ないけど。

「さて笹村、お前を呼んだのは他でもない。てかまた随分とオシヤレしてきたな」

「雄大くんに大事な話があるからって言われたからっ……！　だからっ……！」

「お前なあ、学生が家に呼んでプロポーズするとか思ってるのか？」

それともあれか、俺も結衣も今日は帰らないから、とかそんなことささやかれるとか――」

「わー！　わあああ！　わあああー！！　うわあああああんっ！！」

遮ろうとした声が途中から泣き声に変わった。まあ、すまん。

悪かったから女の子座りしながら猫の手で目尻ぬぐうえぐえぐ泣きは勘弁してくれ。お前それでも大人ですか。見た目まだまだ若いケド。

「先生のばかあ……！！　ぶさいく、いじわるうう……！！」

「うっせ、馬鹿は余計だ」

「おじさんほんと、不細工も意地悪も否定しないよな」

「自覚あるって、大事なことだからな」

「あの、わたしはちよっと……やです」

「んー……結衣？　俺は気にしないぞ？」

「大事な人を不細工、なんて言われたら、嫌です」

「事実でも？」

「事実でもです」

「いや……ユイ？　そこは否定するところじゃね？」

「不細工でもステキだからおじさんなの！　ユーダイだってわかるで

しよ!？」

「や、まあ、そりやおじさんだし」

その理解はどうなんだ。まあ、否定するところにもないほど不細工おじさんな俺だが。

「そうですよね。先生はあの頃の生意気な私の軽口にも、笑って対応してくれた人で……教え方も上手だったし、なにより生徒寄りの考え方を持ってくれる人で、当時の教師なんかよりもよっぽど……」

「? 先生?」

「あ、いやえつと。……当時の自分を思い出して、ちよつと自己嫌悪……。先生、あの時は失礼なことをたくさん言ってしまったって……」

「失礼って? 事実しか言われた記憶がないが」

不細工とか、笑った顔が気持ち悪いとか、鏡で見ても気持ち悪かったからなあ俺の顔。

いつしか慣れたらそれが普通になっていた。鏡の前で今日も不細工だぜ、って暗示かけるんだよ。習慣自己催眠ってやつ。

ずーっと続けているとそれが当たり前になって、苦じやなくなる。

ただしストレスは当然溜まるので、車にブチ当たる前みたいにいずれ心がやさぐれる。

今はスツキリしてるけどな。

「……先生は少し、自分への評価が低すぎると思います」

「ですよ——」

「低いからしゃーないだろ」

「ね、って言わせてくださいおじさん!」

「いや、だつて考えてもみろ。ガキの頃から不細工言われて、周囲に気持ち悪がられてな? 教師にまで『可哀相だからグループに入れてあげて』なんて言われた俺だぞ? 運動が出来れば、頭が良ければ、気遣いが出来れば。そんなもしもを期待して、死ぬ気で頑張った。親にも姉は綺麗なのに弟はどうして、なんて陰で言われてた俺だ、劣等感なんて他の誰よりもあつて、だから何かで優れてなけりやあ……もしかしたら捨てられるんじゃないかって必死だったんだよ」

「捨てるって……」

「え？ おじさん、それマジで？　じいちゃんとかばあちゃん、そんなことを？」

「居なくなった人のこと、今更どうこうってわけでもないけどな。いつからか明らかに差別されるようになった。その差別が、自分が不細工だからって思い始めてからは、好かれようと必死だったよ。なにかひとつでも姉貴より勝ってればって成績表で最高評価取ったりもした。でもさあ、おかしいんだぜ？　そんな立派な成績表を俺に渡す教師がさ、人を見る目してねえの。そんな時、いろんなもんがこぼれ落ちたよ。必死に走ってさ、家に戻って……親に成績表渡して、たった一言でもいいから褒めてほしかった。おざなりでもいい、ほんのちよつとでいいから頑張ったなって言っただけでよかったのに」

……相手にさえされなかった。

親は姉貴に夢中で、俺を視界に入れることさえ煩わしそうだった。じゃあなんで産んだんだよ。なんで生かしたんだよ。なんで育てたんだよ。

そんな思いでいっぱいになった。けど、やっぱりガキだったんだ。

どうにかして振り向いてほしかった。言葉が欲しかった。だから——足りないだけなんだって思った。

姉貴と同じくらいの歳になれば、姉貴の成績より上の自分になっていたならきつと——姉貴より強くなれば、姉貴よりやさしくなれば、姉貴より、姉貴より、姉貴より——！

「ガキなりに頑張ったよ。結果として、体力もついたらし頭もまあ、家庭教師くらいは出来るくらいに。必死になって努力して、もう嫌だ、つて心が爆発しそうになるくらい努力して、そこでようやく立ち止まってみたんだ。どうしたと思う？」

「え……それ、私に訊くんですか？　先生」

「おうお前。……ハツと気づいたら目の前にお前が居た。お前がな、俺の姉貴の話をしてた。嫌味だったらしく、こんな馬鹿丁寧に勉強を教える人が目指すような人なんですから、さぞかし勉強が出来るんでしょうねえくええ」つて感じで」

「え、ういつ!? わっ……私、そんなひどかったですか……!?」

「おおひどいひどい。思わず固まって、立ち止まって……振り返ってみて。……そこには、ぐうたらで馬鹿で、弟にやけに暴力振るうボケ姉しか居なかつたんだ。両親なんてとつくに離婚して蒸発しちまつて。無責任な親の暴走に巻き込まれた祖父母は、そんないざこざの中で心労がたたって死んじまつて。姉貴は姉貴でさっさと結婚して出ていっちまつて。俺だけが……愛情なんてもんを知らないまま、この家に残された」

好きって気持ちとはどんな感情なんですか、なんて……誰に訊いたって教えてくれない。

訊いたところで気持ち悪がられるだけで、親も教師も、入社直後の上司だって教えちゃくれない。

で、結局は仕事仕事仕事。

人生仕事こそ墓場だくって思うのって間違ってるかな。

結婚が人生の墓場だって言われても、好きな人と結ばれるって時点でまだ救いがあるんじゃないの？

一時だろうとリア充して、そんな相手と結ばれてくって、それだけいけたならいいじゃない。

そう……愛情、なんてものを一時でも知ることが出来たんだから、それだけで俺より幸福だ。

「だからな、自己評価なんて低くて当たり前なんだよ。なにせ評価してくれる人がいねえもの。そんな状況で周りから挨拶みたいの不細工、気持ち悪いつて言われてみる。そんな生活ずーっと続けて、そんな時に車に撥ねられてさ。……正直、ようやく楽になれるって思ったんだ」

「っ！ おじさん!!」

「死ぬかも、って思ったらようやく長く息を吐くことが出来て…………したら生きててさあ。そんな経験したら、なんかもういろいろ自分をよく見せようとするのに疲れてさ。だから、諦めることにしたんだ」

「諦める……? って先生!? 今車に撥ねられたって!」

「おう諦めた。撥ねられた。んで、先人の言葉に倣ってみることにし

「たんだよ」

「そんな大事なこと、笑い事みたいに流さないでください！……せ、先人？」

「おう。他人の不幸は蜜の味……だったか？　なら俺が不幸の道を突っ走りや、少なくともこいつらは幸せになれるって思った」

「先生、それってただのやけっぱちみたいなものじゃ——」

「馬鹿お前馬鹿かお前馬鹿そんなやけっぱちにでもならなきゃ馬鹿できるわけねえだろうが馬鹿かお前この馬鹿」

「先生それやめてください教え子の頃にそれやられて私がどれだけへこんだと思ってるんですか！」

「やられてから真面目に勉強聞く気になったんだろが。あの頃のお前ほんつとめんどかつたぞ」

「はうぐっ……！　じ、自覚してるだけに言い返せない……！」

へによりとへこむ笹村……はともかくとして。

ちらりと双子を見ると、むすつとした顔でこちらを見ていた。おー、怒つとる怒つとる。

「おじさん……わたしもユーダイも、そんなの頼んでない」

「そうだけ叔父さん……俺は叔父さんの不幸で幸せになんて——！！」

「二人とも、子供の頃によく俺のプリンねだつてきたよなー♪」

「うぐっふ！」

「俺が隠しておいたカップラーメンとかも見つけて勝手に食べちゃうしなー♪」

「はぐっふ！」

「楽しみにしていた俺の幸福の味はどうだった？　二人とも」

「じっ………ぐめんささい……！！」

「先生……本当に容赦ないですね……」なんて笹村に言われつつ、まあ、と呟いた。

「そんなわけで報告定例会だ。ぶっちゃけ俺は姉貴が好かん。けどもう水に流すことにした。諦めたしな」

「あ、はい。わたしもいまのおじさんの話でお母さんのこと嫌いにな

りました。いえ、厳密に言えば祖父母ですが。お母さんのことはそのー……」

「あれだろユイ。……「気づけよ！ 止めろよ！ 何処見てなに暢気に過ごしてんだ！」だろ」

「ん、採用」

ずびしとユードイを指差し、うんうんと頷く結衣。姉弟間では強気になれるのになあ。

「まあ、俺の過去のことと姉貴になにを言ってもどーしよーもないよ。姉貴は知らなかった。そこんところは親が徹底してたからな。で、俺がこうして鬱憤を口にしたのは、誰かに話すことで、もう引きずるところがないようになってところだ」

「先生……」

「結衣とユードイはどうだ？ なんか、姉貴に言いたいこととかあるか？ あ、俺に関係することはスルーでな。姉貴はほんと知らなかったんだからどうしようもなかった。じゃ、結衣」

「え？ えと……産んでくれてありがとう。わたし、叔父さんと幸せになります」

「――、ユ、ユードイ」

「産んでくれてありがとう。俺、叔父さんの教え子と幸せになります」

「……………笹村？」

「お子さんを産んでくださってありがとうございます！ 私は雄大くと幸せになりつつ、先生……弟さんと娘さんの幸福を全力で応援しますー！」

「てめえら本当は俺の幸福願ってねえだろ!!」

「二とんでもない!!」

「うそつけえ！ それ姉貴に言ったら俺がどうなるかくらい想像つくだろ!!」

「あつれー？ 先生諦めたんじゃないですかー？ どうもでないんじゃないですかー？ これはお義母様に伝えると私達がとおっても幸せになれることなので、是非ともお伝えくださいーい」

「笹村テンメツ……!!」

「あの……わたしも、お母さんにはちゃんと報告したい、です」
「結衣!？」

笹村はともかく、おず、と手を上げて言う結衣に、おじさんびつくり。

さらにはユーダイまで頭の後ろで腕組んで、たはーと息を吐いてから提案に乗る始末。

「そろそろきつちりしよーぜ叔父さん。あのプロジェクトマザーとプロジェクトファーザーに、俺達は俺達でよろしくやってますよーって」

「や、けどなっ……」

「だってさあ」

「あの、おじさん?」

「あの人、向こうで子供作って幸せしてるんでしょ?」

「!? しっ……知って、た……のか?」

「そりや聞こえるって。田舎の、お隣さんと距離の離れた家だもの。近くに居なくてもおじさんの驚く声とかまあ、いろいろ」

「あの人が幸せしてて、なのに叔父さんが幸せしてないの、わたし達は嫌です」

「そうそう。だからさ、叔父さんが幸せになれるならなんでもいいんだ。あ、だからって理由でユイを差し出すー、とかそんなじゃねえからな?」

「当たり前でしょばかっ! わたしはちゃんと、わたしの意思で叔父さんにぞっこんなんだからっ!」

なんてこった、人の口に戸はなんとやら、秘密はあっさりバレてしまっていた。

まああれだ、姉貴。……これはさっさと言わなかったあんたと、会話をさせなかった俺が悪いわ。

ん? あれ?

「待て。じゃあなんだってお前ら、あんなどんよりした反応してたんだ?」

「それは……だって」

「ほら……なあ？」

「歳の差恋愛なんて認めてもらえるかどうか……」

「ああもう姉弟だなあ……!!」

笹村と二人頭を抱えた。

まあ、笹村も二人と同じ理由だろうが。

7：因幡すみれーいなばすみれ（再）

双子の在り方への認識もそこそこに、手の中のスマホを見下ろして一息。

「まあ、なにはなくとも電話だな。かければ出るだろ数秒で。はいぽちー」

「二ひい心の準備をつ……い。 ああああ……!!」

なんなんだお前ら、実は三人キョーダイなのか。どうしてそこまで息ぴったりなんだよ。とか思っている内に繋がった。姉貴である。

『待ってたわよちよつと。今日なんか遅かったじゃないの、いっつも同じ時間に、って言うてんでしょが』

「ちよつと話すことで揉めててな。驚く話と驚く話と驚く話、どれしてもらいたい?」

『驚く話しかないの!? なにやった!? あんたなにやったの!?』

「実はユーダイに結婚を前提にした彼女が出来た」

『……………』

あー……こりや、固まったな。そりやそうだ、姉貴の中じや、ユーダイはまだまだ可愛くて無邪気で、生意気だけど時々素直なあ頃のユーダイなのだ。

目を閉ざせば思い浮かぶあの頃のユーダイ……! そんなおこちやまユーダイが、どこぞの女にたぶらかされ……!

『ふざっけんじやないわよどこのどいつよ名前言いなさい名前エエエ!!』

あ、思った以上にブチギレてた。

「因幡すみれって言うらしい」

『はーああああ!? なあによそのふざっ……あたしじゃないのよそれ!! ナメとんのかアンタ!!』

「今自分の名前のことふざけた名前とか言いかけたろ」

『るっさい真面目に答えなさいよ!! てか結婚を前提に!? 早いわよ早過ぎでしょ!? あの子たちまだ子供なのよ!』

「いつまで子供すぎる幻影追ってんだよ。もう18だぞ?」

『アンタが写真のひとつも送ってこねーからでしようが!!』

「あ、すまん。じゃ、送るな。おーい三人とも、こっちこいこっち。で、好きな感じでリラックスな。ほい、ほいほい……んじゃ、チーズつと。で、送信」

三人を呼んで、横に座らせたりして、各々好きな姿勢で写真を写して姉貴に送る。

……ちなみに。

結衣は俺の腕に抱きついてきて幸せそうな顔をして、雄大は俺の横で笹村の肩を抱き寄せてブイサイン。笹村はそんなユーダイに甘えるような姿で写り、それを問答無用でメールで送ると……通話したまま送信した写真を見たらしい姉貴が、わけのわからない言葉を絶叫、やかましいので通話をカットした。

「よし、紹介終わり。んじゃ、姉貴たちが帰ってくるまで自由にやるか」

「え、え? あの、先生? これで、というかこんなので本当に認めてもらえるんですか?」

「ああ、余裕だな。写真送るためのメール、見るか?」

「え? それになにか関係が?」

ほれ、と見せる送信ボックスの中身。タイトルは、〃対価でもなんでも、好きなだけ持ってけこのやろーって言ったよな〃だった。

「え……こ、こんなんでもいいんですか?」

「いいのいいの。ほれ、好きなだけラブラブなさい」

「なさいじゃないですよ! なんでもちよつと高貴なる者っぽいんですか!」

「ん? 俺別に誰が目の前でイチャついたって気にしないぞ? 学生時代は小学から果ては大学まで、そりやあもう存分に見せ付けられたもんさ。特に高校なんて彼氏/彼女が居ることがステエタス☆みたいなところがあって、〃ああんら万年お独りの八十島さあん? 今日も独りでお食事ですこと? ドウホホホホ〃とか……言われたなあマジで……」

「そんなこと言う人実際に居たんですか!? そっちの方が気になりますよしろ!」

「なるなよばかもの、ラブラブしてろ。あと居たよ、マジで」

その日からあだ名がドウツホリーヌ夫人になって泣いてたけどな。人つてとりあえずあだ名から入る気がするよな。

「お、メール着た」

「ひいつ!? なななんなんです!? なんて書いてあるんです先生!!」

「おー。……件名が『呪殺』だな」

「じゅさつ!?!」

「で……あー、そつかそつか。そういや驚く話、つての三回繰り返したのに、写真見ただけじゃ一個しかわからないかも、か」

笹村がユードアイに抱きついている。姉貴にとつちや誰この人状態だ。

ユードアイは宗次さんに似ていて、結衣もどつちかかってーとそっち寄り。そうなればほんとに子供の頃の二人しか見てない姉貴でも、子供のことはわかるつてもんだ。

てかまあオシヤレした女性が結衣だとは思わんだろ。

で、結衣は俺に抱きついてはいるものの、表情なんて作ろうと思えばいくらでも作れる。ならばドツキリかもしれない方向に逃げたつてこともある。

故に、このメールの『驚く話、なんで全部言わないのよ』はそういう意味なのだろう。

「電話してこないってことは、一応納得はせずとも受け取りはしたつて段階……なんだろうかなあ。まあいいや、電話を折り返さないならこつちもメールで返そう」

俺と結衣が恋仲になりました。法律で結婚は出来ませんので未婚の夫婦になります。

あと雄大の恋人は教師です。あ、あと俺の元家庭教師の教え子です。

ほいこれで三つと。送信。

……。送信から少しして、急に鳴るスマホ。少し待つと留守番電話

サービスに繋がりが、そこから地獄の底から奏でられるような呪詛が聞こえた。

なので、俺は笑ってメールを打った。送信もした。

【俺の不細工が原因で、結衣は不幸になりますか？俺は、俺が不幸になることで、こいつらを幸せにしてきたつもりです。まだ足りないのなら、いくらでも笑って不幸になります】

返信が来る。

【ふぎけんな馬鹿!! アンタが不細工でいつあたしが迷惑した!

あ、いや、あつたわ迷惑。両親があたしばかり構ってうざかった。やれあれをうまくやれこれを綺麗に使えとか。あのね、あんたが張り切るのには勝手だけど、こつちに迷惑かけるなっつーの。あたしはあんたみたいになんでもかんでも努力で埋められないんだから】

返信する。

【ふぎけんな馬鹿お前馬鹿、俺はそんな親に構ってもらいたかったんだっつーの! 不細工な所為でいっつも鼻直しされて、誰にも認められなくてどれだけ泣いたか知ってるのか馬鹿お前!】

【ふぎけんな馬鹿! あたしはいっただってあんたんこと認めすぎて後悔しい思いしてたんだっつーの! 姉であることしか優位に立てないとか情けないじゃんか馬鹿!】

【はーああああ!! いつ認めたっつーんだよ! えらっそうに人に命令するばっかでひとつことも褒めたこともねえくせに! てめーの口から感謝の一言でも先に出たことあったか!? なんでもかんでも押し付けてからごーめーんって言うばっかだったじゃねえか!! 大体俺が事故った時だつててめえの所為で!】

【え? なにそれ。事故ったってあんた】

【あ、ケータイの話ね、ケータイ】

【待って、ふぎけんの本気で無し。事故ったのね? あの時の、マジだったのね?】

……。

【返事しなさいよ! 電話かけるわよ!】

……。

【ちよつと】

……。

【おねがいだから】

……。

【ねえ】

【アイエエエ！ 電池!? 電池ナンデ!? グワーツ!!】

【ちよつとアンタそれでしらばっくれる気!? いいからちゃんと話をしなさいよ!!】

……悪は去った。むしろ電源落とした。

そして俺はやりとげたサワヤカ笑顔（フォルゴレ）で振り向き、汗を拭うゼスチャーで「認めてくれるって……ッ!!」と言ったのだった。姉貴、すまん。精々罪悪感と戦いつつ、しよおおおおくがねえなあゝゝと認めてくれ。

「……………？ どした？ 笹村」

「いや、その……………なんか、腰……………抜けちゃったみたいで」

「……………」

「やべえ尊い……………！ 先生マジ大好き……………！」

「おー、いけいけユーダイ、相手は動けないみたいだから抱きつくくなり部屋にお持ち帰りするためにお姫様だっこするなり、やりたい放題だぞー」

「ぴいうっ!! なひゃっ……………なななに言ってるんですか先生！ そんなっ、そんな抱きつくとかお姫様抱っことかっ!!」

「お前の靴を始末して、ガラスの靴に変えとくから、頑張れ」

「それただ私が帰れなくなるだけじゃないですか!?!」

「おうっ、泊まってけっ! 何泊でもなっ!」

「かつての先生が全力で異性交遊を奨めてきてますっ!?! ……あ、あの、先生? もしかして、ですけど。私という前例を無理矢理作って、結衣ちゃんとよろしくしようとか……………思ってますんよね?」

「……………」

「やめてくださいその心底呆れた目で見るの!」

「ぶつちやけお前をからかいたいだけだ。昔っから慌てると表情が面

「白いやつだったし」

「先生全ツ力で最ツ低ですね!!」

「お前なあ……色恋に首突っ込むやつが最低じゃないわけねえだろ。漫画でもよくあるだろー? 相談されてる親友が心の中で『面白そうだから黙っとこー♪』とか言ってるの。アレほんとクソだからな。親友の一生を左右するかもしれないことを娯楽感覚やゲーム感覚で見るとか真実クソだ。な? 最低だろ?」

「先生の所為でもう恋愛漫画とか楽しんで見れそうもありません……親友キャラとか好きだったのに、今じゃもう最低キャラにしか見えません……」

まあ、だからって相談して、相談された人の言う通りにやって、失敗すれば全部そいつの所為にするヤツも実にクソだが。

つまり恋愛ごとなんてものには人を巻き込まない。これが大事。

「でも……そうですか。これで雄大、くんと……」

「いつも通り雄大、って呼び捨てにして甘えてもいーんだぞ、笹村」

「なんで先生がそれを!?!」

「あの……あの、おじさん。そろそろ俺の恋人許してやって……。叔父さんが話しかけるたんびに墓穴っていうか、俺達の秘密が……!!」

ここでユーダイ、左手で口を押さえながら、右手で挙手して申請。顔真っ赤にしてぷるぷるしてる。恥ずかしいっていうよりは、可愛い生物を見て悶える寸前、って状況に近い。

しかし、言いつつも笹村の体を支えるようにして立ち上がり、にっこりと笑うユーダイ。お姫様抱っこ、完了である。

あわあわと口をばくばくさせて顔を真っ赤にする笹村をよそに、ユーダイは「あんまりいじめないでくれよ、おじさん。こぼさせるのは幸せの涙だけにしてあげたいんだから」と言つて、歩きだした。「でもいろんないろんな表情も見たいんだよな?」

「それもっ、俺がっ、させたいのっ!」

言わせんなよもー……と言いつつ、行ってしまった。

……さて。

「わたしも。あの。おじさんのいろんな姿が見れて、嬉しいです」
「基本いじわるなのにか？」

「はい。おじさんのいじわるは、自分の不幸で他人を幸せにする意地悪ですから。とんだツンデレさんです」

「っははあ、ツンデレってのは美形がやるから映えるんだよ。俺がやったってキモいだけだ」

「はあ。まあ、わたしはそんなおじさんが好きなんですけどね」
きゅむりと、余計に抱きついてくる。

伸ばした手は額に当たり、俺は撫でるか押し退けるかの選択肢を頭の中に浮かべたが、少しの思案のうちに……撫でるを選択した。

他人は幸せに。俺は不幸に。それでいい。俺の不自由はこの際後だ。

……え？ 姪に好いた惚れたの感情を持てるのかって？ こちとら現在まで女ツケのカケラもなかったクソ不細工様であるぞ？

……女の子に腕に抱きつかれて嬉しくねえわけねえだろうがあああああつ！！

えー、この際だから心の中でハッキリ言っておこうと思う。

……姪の容姿が、幼き頃より思い描いていた理想のおなごめに驚くほどハマっておるのです。

なんでかな。不思議だねウフフ。

そういえば小さい頃から結衣に、おじちゃんが好きなのってこの中のだれー？ って雑誌とか見せられながら訊かれたっけー。

恥ずかしくて誤魔化そう、烏滸がましいからはぐらかそうとしたらなんでかバレて、馬鹿正直に答えさせられたっけー。……髪型から服装まで様々を。

……………エ？

もも、もしかして……………俺の好みに合わせて……………!?

「……………」

そういや、小学の頃にはとっくに好きになってくれていた、って言うってたっけ。

(うあー……………)

まじか。うあー、まじかー……。まじかー……。
どうしましよう、ああ姉さん、俺は、俺は……！
姪が……姪がめちゃんこかわいかとです……！
だが大丈夫、不細工は凶に乗らない。

俺はこの鋼の意思を以って、清く正しく――

「あ、の……おじさん。あの。は、はしたない、とか……思わないでくださいね？ あ、の……も、もういっかい……その……キ、キス……」

「しよう（結婚しよいや法律は守る）」

男女ですもの、キスなんて清いです。

うるせー！ 顔が清くねーのは生まれつきだよ!! わかってんだよそんなことは！ 不細工は細工しても有細工になっちゃくれねーんだよ察しろちくしよー！

けど、だ。

「あ、ああその」

「……？ おじさん？」

「歯とか……磨いてきて、いいだろうか」

「……」

恥を殺して言ってみれば、彼女は笑って、けれど問答無用で、俺にキスをした。

8：因幡家の人々―いなばけのひとびと

時が流れる。

「卒業したら結婚って、大学のことかと思ってた」

「そんなん待てるわけないじゃん。俺、こういうことには結構こだわるから」

「ま、そーだな。おめつとさん、ユーダイ、笹村。てかよく許したよな笹村んとこの親御さん」

「え？ あ、はい。おとーさんは私を嫁き遅れにする気？ って言ったら一発でしたよ？」

「……なるほど」

「おめでと、ユーダイ。先越されちゃったかー」

「おうありつとさんユイ。先って意味なら恋愛経験では遙か先じゃん」

「あははっ、まあ、白無垢もウエディングも諦めたけどねー」

「むー……先生？」

「落ち着け馬鹿笹村お前馬鹿、どんだけ努力しても法律の壁は越えられねえし、犯罪者になっちゃったら幸せになんてできねーだろ」

「わかってますけど……」

「ま、とりあえずお前らはしつかり夫婦やってろ。てか、ユーダイはどーすんだ？」

「センセの……絵里のアパートに住むよ。決めてたことだし」

「……そか。なんつっーか……感慨深いよなあ」

「叔父さんのブサ顔見るのもしばらくは無くなるのかなあ」

「っははー、うっせーこんにやろ」

「あいつた！ ちよつとおじさんストレートはないだろ！」

「うおあいたつ、ばっかお前加減しろ加減！」

「あははははっ！」

「っはははははー！」

「……………」

「……………」

「……一回、だけだから。その、呼ぶの、許してよ、叔父さん」
「ん？ なにがだ？」

「………今まで、その………ここまで育ててくれて、ありがとう。
俺、マジ……ほんと、幸せだった。ありがとう、父さん」

「――！」

「………そ、それだけ。ああくそ、かつこわりい……！ 途中で泣くな
んて――あでっ！」

「ぼっ……おまつ……く……ば、………ばかやろおお……!!」

「……おじ、………ありがとう………ありがとう……！ おじさ
ん、ありがとう……!!」

時が流れる。

「平和く……」

「平和だなー……」

「結衣く、お前、大学は近くのにしたんだっけかー……」

「うんー……行くのも帰るのも時間かかるの、不便だし……わたしの
人生目標に、べつに高学歴いらなからー……」

「そっかー……」

「……」

「……」

「しあわせー……」

「しあわせだなー……」

「んん……おじさん、もっと、もつとぎゅーって……」

「おー……」

「ふやああく……おこたでごろごろ、おじさんといっしょ……しあわ
せー……」

「おー……お？ 電話………ってユーダイか。もしもし？ どしたー」

『お、おじさんっ！ そのっ………人生相談があるんだけどっ！』

「――！ ……どうした？ なんでも言ってみろ……!!」

『セツ〇スってどうしたら上手く出来るんだ!?!』

「結衣ー、しあわせだなー……」

「うんー……」

『いやおじさん冗談とかじゃなくて俺今本気でテンパってて！ いいいい今絵里がシャワー浴びてて上がってきたら俺、俺、アワワワワワ……!!』

「情事の前に叔父に電話とかなに考えてんだアホオオオツ!! お、おとおおお前ばっかお前ほんとお前そんつ……お前えええつ!!」

『どうすりやいい!? どうすりやつ……あああシャワーの音止まった! やばいやばい助けておじさん助けてえええつ!』

「助けろつたつて……! あ、あー……そだな。なにはなくともそのー……あれか? 避妊か?」

『いやつ……それが今日は安全日だし最後まで一緒に、初めてだからなんにもつけないでつて言われてて……!』

「……」

「……ユーダイ。女の子の事情を人に話すとかサイテー」

『ユイそこに居んの!? つてそういやさつき幸せーとか! ぎやああ忘れて忘れてえええつ!! つてああああ出てきたあああつ!』

「ユーダイ」

『つ……お、おじ、さん?』

「……特に言うことはない。お互いが初めてなら、きちんと話し合つて、支え合つてこい。んで、男になってこい。それだけだ」

『おじさん……お、おうつ!』

時が流れる。

「……」

「……」

「笹村先生の真似つてわけじゃないんですけど、でも……初めてを最後まで、つて……やっぱりそうあつてほしいなつて思うんです。だから」

「こんな不細工相手に本当にいいのか?」

「他の不細工だったら絶対に嫌です。わたしの叔父さんで、不細工なおじさんだからいいんです」

「……かわいいなあちくしょう」

「え? あの、今なんて」

「ああその。ゴムは？」

「むうっ……わ、わたしはっ、ゴム製品なんか初めてを捧げる気なんてありませんからっ!!」

「……おう、光栄な上に責任重大だな」

「はい。お父さんとお母さんの許可もちゃん取りましたし、法律以外なら向かうところ敵無しですっ♪」

「……え？ お前そんなことしてたの？」

「はい。まだ見ぬオトートのことでつきましたら大体32発くらいで」

「一発じゃないのな……あの姉にしては頑張った方か。ちなみに頻度は？」

「毎朝一回一ヶ月くらいです」

「ああうん……なんか初めて姉に同情するかも」

「あの、おじさん。わたし、実は結構えっちです」

「まあ、なんか知ってる」

「だからですね、その。……た、たくさんたくさん、気持ちいい事、していきましょう。してほしいこと、したいこと、たくさんあるんです」

「……参考までに、どこで得るのそういう知識」

「乙女のたしなみですっ」

(……これ絶対語尾にハートマークついてる感じだわ……)

時が流れる。

「……」

「……」

「……」

「……」

「はいはいその双子、久しぶり会った途端にやり遂げた顔で手え叩き合わすみたいに握手しない」

「映画とかでしか見ないものだと思ってましたよ、あの腕相撲みたいなフォームで握手するの。あ、先生お久しぶりですその後どうですか？ 結衣ちゃんとは」

「お義姉さんとは呼ばないのか？」

「ソツグ!? ……よっ……呼びませんから……! それより、どーな
んですか結衣ちゃんとは……!」

「どうって?」

「で、ですから、仲、というか……その、夜の関係とか」

「……愛情を以ってめちやくちや貪られてる気がする」

「先生もですか?! わ、私もっ……!」

「え? お前も?」

「はい……普段はやさしいのに、いえもちろん夜のほうもやさしいん
ですけど、優しい捕食者になるというか……! やさしくて、とろけ
てしまつて、昨日なんてぼーつとしてる内にいつの間にか、お、おしっ
……」

「えくりっ?」

「ひゃあうっ!?! な、なななんでもないワヨ!? 私先生になんも
言つてないワヨ!?!」

「……ユーダイ」

「ん? おじさん、なに?」

「あんま特殊な方向に行くの、勘弁な? 家の嫁もどきが真似するか
ら」

「うーあー……なんかめつちや目え輝かせてるね。あ、ユイ? 急ぎ
すぎるのダウトな。何日でも時間かけてゆっくりほぐして——」

「ふむふむ……!」

「なに話しちやつてるの雄大いっ! だめえ! 私との経験とか人に
話していいわけないでしょー!?!」

（しばらく会つてなかつたら、かつての教え子の後ろが開発されてい
た……本人の前でそういうこと言うなよ、っていうかそもそも俺に暴
露とかどう反応すりゃいいんだよもおお……!!）

「……!!」

（……そして姪にわくわくの瞳を向けられる叔父の凶。……今日はあ
の姉への定例報告だけど、これ伝えたら地獄しか待つてないよな
……）

時が流れる。

『……あんさ、ちよつと』

「どした？ いきなり暗いなおい」

『暗い話とふざけんな話と驚く話、どれ聞きたい？』

「……姉貴のそれ、全部繋がってるってパターンばっかだろ。結論から頼む」

『はあ……。ほんとあんたって……。まあねー、そうよねー、そりやそうよ。なんか逆にしっくり来たわ』

「？ なにが」

『あのね、こつちであんたの両親に会った』

「へ？ ……へ？ なに、離婚して出てって、そつち居た——へ？

両親？ なんだそれ、そつちで再婚したのか？」

『んーん、離婚すらしてないわよ』

「おいおい、なに言ってる………待て。……俺の、両親？ 言い方、合ってるのか？」

『合ってるわよ。んで、あんたチェンジリング。あんたそつくりの男が居てさ、鬱憤もあつたし、あんたこんなところまで何しに来たー！ “つて掴み掛かったのが切っ掛けで知り合った』

「大丈夫か、姉（頭が）」

『副音声まで聞こえるからやめれ。んでね、あんたの写真見せたら相手も驚いちゃって。お返しにつて息子さんの写真見せてもらったら、これがお父さんとウリ二つ。こんなのつてある？ つて話になって………』

「……犯人は？」

『あなたの父親の母親。せめて孫は綺麗な子が良かったんだとかなんとか。それもうあなたの孫じゃねーでしよつて話だけどね、どうせ自分が腹痛めたわけでもないからそれでいーんだつて。問い詰めたらあつさり吐いたわよ』

「………」

『うちの両親は……まあ、自分がおなか痛めて産んだ子じゃないんだとしても、ほぼ育児放棄したようなもんだ。こつちだつて離婚して出てつてくれて、すつきりしてるくらい。んで、あたしはあんたのこと

今でも弟だつて思つてるし、姉であること以外でなくんも勝るものがないあたしが誇れる弟だ。ぶっさいくじやないつてことは勝るけど』
「おい」

『だから、まあ。いーんじゃない？ あつちも今更自分の子として育ててきた子を、自分の子じやないなんて手放す気もないみたいだけど、かたちとしてあんたを子として受け入れることは出来るつて言つてる。だから、つまり、そのー……』

「姉貴……？」

『……だから、その。ほら』
「？」

『だあつ！ もう！ いーからそこは無茶言つてみなさいよ！ 察しなさいよ！ 言いづらいでしょーがこんちくしよー！ ……で！』
うちの娘、嫁に貰う気、あんの!? ないの!』

「……、……あつ」

『……“あ”？ “あつ”……？ “あつ……”だあああつ!? あんた今気づいたの!? あんたの中でその程度のレベルなのかうちの娘のことは!』

「無茶言うなお前バカお前!! 親だと思つてた相手が親じゃなくて、ほんとの親が外国に居ただあつ!? そんでいきなり結婚できるとか言われたつて……どんな創作物語だ、つて疑いたくもなるだろが!」
『うるっせーわねー! こつちだつて子供の縁であんたの親に会つたつて経緯なんだから、三人目云々で脅迫するみたいな行為に踏み込んだ弟と娘にとやかく言われる筋合いねーわよ! 三人目のお陰なんだからね!? もう文句とか言わせないからそのためにもさつさと祝福されるやこんにやろー!!』

「ううわむっちやくちやだこの姉……!」

『うっほほははははは! 感謝なさいお姉さまに! そしてそつちも祝福しなさいよ三人目を! ……家族増えたのに喜んでもらえないの、これで結構辛かったんだからさ……ほんと、勝手なことしたのは謝るから。あんたに子供押し付けて、今更こつちでとか、あんたにとつてはぶぎけんなつてことにしかならなかつたとしてもさ。……』

やっぱ、辛いんだよ』

「それで娘の結婚を盾に祝福しろってゲスな母が電話の先に居るんだが、どう思う結衣、ユーダイ、それから笹村」

「『サイツテーですね……』」

『ぐおつはあつ?!? ぐ、ぐぐつ……ふ、ふんっ? なんてったつけえーと……ささせがわさん?』

「笹村ですお義母さん」

『おかーさん言うなあたしやまだ認めてないからなおかーさん言うなあつ!!』

「話が進まん黙れ」

『黙ったら話進まんでしょうが!!』

「こつちで進めとくから。あ、お子さんおめでとな。それだけだな? じゃ」

『待って!? ねえ待って!? あたし今とっても重大で大切なお報せしたわよね!? なんでそんな冷たいの!?!』

「いや、だってどうせ面倒なことしか話さないだろ、こつから」

『笹村さんも子供産んでみればわかるって言おうとしただけよ!? 面倒なんてことないでしょーが!』

「よかつたな、笹村。ユーダイと子を産んでもいいとき」

「えっ? あつ………お、お義母さん……!」

『ちがあああああつ!! ちがつ! ちがあああつ!! おかーさん言うなー! 違うからアアア!!』

「じゃあわからねーんじゃねえか。なにが子供産んでみればわかるだ馬鹿」

『はおっぐ!?!』

「な? 面倒なことになったろ? ——切るぞ」

『待ってちよつと待って!?! せめてこれからのこととかあんたとあたしの関係のこととか——』

「おう。よろしくな、お義母さん」

『へ? おか………』

「結衣はきつちり幸せにすつから。そつちはそつちでよろしくしとい

てくれ。あとはまあ……お前だつて今気づいたんじやねーか。血は繋がつてなくても、やつぱキョーダイだよ、俺とあんたは」

『はぐっ……ぐすっ……おか、おかーさんって呼ぶなああつ！ 姉貴以外許さないから！ あたしはあんたのお姉ちゃんなんだから、姉貴以外許さないんだから！』

「やだ。よろしくな、お義母さん」

『おかーさん言うなああああああつ!!』

……時が――

9：片桐芳樹―かたぎりよしき（終）

そんなこんなあって。

どこぞの感動物語みたいな偶然もあって、叔父でもなんでもなかった俺は、姪でもなんでもなかった年下の女の子と結婚することになりまして。

「で……やっと帰ってきたと思えば、娘の結婚式にギリギリって……」

「うーさい、来てやっただけありがたいがたく思いなさいよ」

で、姉はようやくプロジェクトを終え、義兄とともに日本へ戻ってきた。

本当はサプライズとして黙って帰ってきて驚かせようとしたらしいんだが、帰国日が丁度俺達の結婚式の日。

それを伝えたら「はあああああつ?! ふざっけんじやないわちよつと遅らせなさいよ!」とかバカハラを始めたので貴様は招待しないと云ったら泣かれた。

泣かれた上で、その日に帰れることになっていると言い出すからこっちも大慌てだ。

「んでね、あんたの結婚式を一応ビデオに撮ってくれてあんたの親に頼まれててさ」

「紛らわしいな、俺の親とかどつちの親とか」

「どーでもいいわよンなもん。で、で? 結衣は? 雄大はつ? あ、それからサンサーラナーガさんはつ?」

「お前笹村のこと覚える気ないだろ……」

「うっせばかうっせ。勝手に立会人になって許可なんて出して、あたしや認めないんだからね! もう結婚してよーが認めないんだからね!」

「それ言い出したら、”三人目のことも弟として認めないからって”言っておいてくれ”って言われてるんだが」

「やめろよーう!! そういういじめみたいなこと言うの、やーめーろーよーう!!」

「ああうるさいうるさい」

「なんだよもうこの不細工弟はー！　ちよつとはこつちの苦労も考えなさいよ！　弟だと思つてた努力マンが弟じゃなかったとか、娘がなんか自分と近い年の弟みたいなおっさんと結婚するとか、息子がおっさんの家庭教師の教え子と結婚するとか！　普通こんな人生ある!?　ほんと物語みたいなの人生じゃないの！」

「いろいろ悩んだ末に人生変えてみたいなら、一度車にでも撥ねられてみる。人生変わるぞ」

「変わる前に終わるかもしれないでしょーがこの馬鹿！」

「なんだと馬鹿お前馬鹿この野郎馬鹿」

「あによばかこの馬鹿お前馬鹿このお前」

いろいろあつた人生だつた。本当に……本当にいろいろ。

けど、姉弟じゃないつてわかつた今でも、一緒に生きたいつかがあつて、似てない二人なのに似た部分があつて、似た癖があつて。

やがてそんな風に馬鹿お前馬鹿と言ひ合つて、笑つて、どつき合つて。

まったくの他人な俺達キョーダイは、くだらない不幸自慢と幸せ自慢をしながら泣いて、笑つて、気持ちをぶつけ合つた。

「うおー！　センパーイ！　カッケェつすよ服だけがー！」

「っははー！　このやろー!!」

「ぶおつふセンパイちよ、ぎぶ！　ギブつす!!」

「いやあ八十島あ！　お前もとうとう結婚かあ！　ぶっさいくだなあと思つてても、やっぱ人間顔だけじゃねえよなあー！」

「いや、上尾さんはもうちよいオブラートお願いします」

「うっせ、ぜつてー俺の方が先に結婚すると思つてたのになあ……！　しかもお前、あんな可愛い年下美人とか……！」

「しかも高校生つすよ上尾部長！」

「いや法的に問題ねーなら何歳だろーと関係ねーよ。俺や結婚してえんだ結婚。可愛い年下と」

「何歳だろーと関係ねえつて言つた傍から年下言つてんじやねえつすか！」

「うるせえ馬鹿！　年下の方がいいだろうが！」

「なあああに言ってるんすか年上つすよ断然年上！ 年上の女性に、不器用ながらテレテレ甘えられるのがいいんじゃねえつすか！」

「……いいいなー！」

「でしょ!？」

「けどなあお前、年下に頼られるように慕われた甘えとかもいいと思わないか?..」

「……いいつすね」

「だろ!？」

「その前に、どうして自分が甘えられる前提で言ってるんだよ。自分が甘えてもらえるほど立派かどうかだろ、まず」

「うっせバァーカ!!」

「相手決まってる先輩に言われたかねえつすよ先輩のばあああか!!」

「おお前なんかになあー！ “不細工だけど、ちよつと甘えたくなるのよね、八十島さんってー”、なんて噂する女どものコソコソ話聞いちまった俺の気持ちかわかるかってんだバァーカ!!」

「そうつすそうつす！ “丁寧に教えてくれるし面倒見もいいしやさしいし、ほんと不細工じゃなければ最高よねー！ ……ほんと、不細工じゃなければ……私が周りなんて気にしなれば……”なんて気になるあの子が言ってるってこ見ちゃって、俺にどうしろつーんですか先輩のバァーカ!!」

「どうもこうも。顔がよければ誰でもいい人なんて知らん」

「………」

「………」

「おめでとさん、八十島。嫉妬はするが、お前に笑顔が増えて、俺は嬉しいよ」

「………うす」

「俺もつす、先輩。俺、実は、仕事……何度も何度も辛くてやめようって思ってたつす。先輩が助けてくんなきや、どんだけ泣いたかもわかんねつす。……幸せになってください。先輩はぶっさいくけど、ほんと、人としてマジ尊敬してるつす」

「………おう」

勤め先からは部長になった先輩や、かつては自殺しそうなほどんよりしていた後輩の川西が来てくれた。

こちらともどつき合ったり笑ったりだ。

不細工なところ以外は随分とまあ高評価だったらしい。言えよ。それ言つてよ、もつと早く。

まあいろいろ諦めるような状況に陥つてなけりや、あの事故から自分が変わることもなかったわけだが。

……本当に、人生つてのはなにが切つ掛けでどう変わるのか、なんてものはわからないもんだ。

けど……まあ。

「おじさんっ！」

「おいこらー？ 結衣ー？ いつまでおじさん言う気だー？ 結婚式の最中に叔父さん呼びとかしたら、祝いに來てるやつ全員が呪いに來るだろうが」

「文字、似てますよ？」

「うれしくねえわ！」

「ふふっ、ええ、100点満点ですっ♪ 芳樹さんに幸せになる気がないなら、幸せな結婚式なんてする意味がないんですから」

「おまつ………はあ」

「芳樹さんの不幸でたつぷり幸せにしてもらつたんですから、今度はわたしがいくつぱい幸せにしてあげるんです。誰かの不幸が他人の幸せ、なんてことが本当に有り得ちゃう世の中ですが、わたしはどちらも幸せな道を選びます。……不幸で幸せにした、なんて言いながら、わたしやユードアイと一緒に笑つてたおじさんを、わたしはぜえええつたいに不幸だなんて認めないんですからね」

「結衣……」

「覚悟してください」なんて言いながら、むんと胸を張るウエディングドレスを着た元姪。

思わず笑つて、言われるまでもなく幸せなんだが、なんて言葉を飲み込んで。

代わりに、これから幸せにされるであろう、変わらぬ不細工ロード

を思いつつ、小さく言うのだ。
はいよ、覚悟完了だ。と。